

19世紀中葉の英国におけるウェスレー派 メソディズムの教育政策と民衆学校教育について(3)

——50年代までの教員養成問題を中心に（上）——

青 木 秀 雄

目 次

はじめに

I. 教員養成機関の創設

II. グラスゴー方式の採用

付記（ここまでが上）

III. ウェストミンスター師範学校の教育内容

IV. J・スコットとその教育観

おわりに

はじめに

ウェスレー派は、支金の捻出に苦しみながらも、46年に至るまで教育への国家干渉を否定してきた。宗派教授を抽象化した一般的宗教教育の導入というような国家の論法を論駁し、教育への国家関与は個人の自由を侵害するものであり、慈善によって推進される宗派教授を中心とした民衆教育運動——ヴォランタリズムによって国民教育政策が拡大されべきであると訴えた。しかしながら、Kay-Shuttleworth のつくり上げた46年体制——宗教団体を中心とするヴォランタリズムを助長し、教育の条件整備に対する保護主義的国庫補助金政策に支えられた、労働者階級の宗教・道徳的教化を主たる目的とする政策の中に飲み込まれていったウェスレー派47年の教育政策の転換について、本紀要前号で具に検討した。その後、46年体制への同派の対応はどのように展開して行ったのであろうか。

このような視座から、同派の初等民衆教員養成問題を考究した先行研究は管見によれば見受けられない。そこで小論においては、1850年代までの同派初等教員養成に拘る問題——特に、モニトリアル・システムおよびグラスゴー・システムと同派師範学校の教育内容や教育観との関係に焦点を当てることにより、国家による保護主義政策である46年体制との関連を具体的に考察したい。

I 教員養成機関の創設

メソディズム百年祭が1839年開催され、216,000ポンド以上の基金が集められたとき、その一部を週日学校の教員養成校設立基金とする計画が年会によって承認された。手初めに、初等民衆学校教員志望の青年を2名ずつ、グラスゴーにあるD・ストウ（David Stow）の経営する師範学校（Training College）と、バラ・ロード（Borough Road）にある内外学校協会立の中央師範学校（Central Training School）に入学させる旨の広報が同派教育委員会より発表された。¹⁾

13名の応募者が現われたが、留学するに相応しい該当者がいなかった。しかし、翌40年

には年末に6名の男子をグラスゴーに送り出すことができ、41年末には初めての女子学生2名を同じくそこに留学させることができた。²⁾

ストウは学生の入学に宗教的制約を課すことはなかった。グラスゴー教育協会(1835年創立)のドングス・ウェール校(後の the Dundas Vale Training College of the Church of Schotland — 1837年開校)には、最初の8年間でウェスレー派教育委員会が384人の奨学生を送ったという。³⁾ここに示された留学生の数は、Mathewsによって示されている人数より大分多くなっているが、数ヶ月の短期留学生が含まれていると解される。⁴⁾

1843年のスコットランド教会の分裂後、チャールマーズ牧師を尊敬していたストウは自由教会に移った。ドングス・ウェール師範学校を継承したグラスゴー自由教会師範学校(The United Free Church Training College, Glasgow, 1845年設立)の最初の入学者36名中23名が、ウェスレー派メソディスト教会より派遣された奨学生であり、一人につき3ギニ(3ポンド3シリング)の授業料をつけて送られてきたのであった。⁵⁾

このようにストウの師範学校にとって、ウェスレー派は得意先であったが、入学推薦者の多くが一般的に言って拒否された。例えば、45年の留学受入学生は44名であるが、59名が不許可、13名は取り下げられている。⁶⁾入学許可が出された割合は、同派教育委員会推薦者の4割弱であった。Westminster 師範学校(Wesleyan Normal Institution, Westminster)の創設された51年までの11年間に、342名の教師がグラスゴーのストウの師範学校で養成されたことが Mathews の先の表から分かる。

ウェスレー派は、19世紀中期に教員養成をストウに委任していたので、同派の初歩学校にはグラスゴー方式が採用されることが多かった。グラスゴー方式は、イングランドではウェスレー派の初歩学校を通して普及していったといわれる。⁷⁾次節で探究するように、機械論的教育観に代わり、次第に教師の人格・教養・知性を要求する新しい教師像と教員養成論が勢力を得てきつつあった。国外からはペスタロッチの教育思想とその実践を試みる師範学校が、国内からはグラスゴーの教員養成の方法が特に大きな刺激を与えた。⁸⁾この新しい教師像の並及に、ウェスレー派の学校は大きな役割を果たしたといえよう。

前述したように、同派教育委員会は多くの入学候補者を推薦したが、その多くが許可されず十分な教員養成ができなかった。そこで、ウェスレー派独自の師範学校の創設を検討し、協力をストウに依頼した。43年6月の同派教育委員会集会の席上、ストウの同委員会宛返信が披露され、その設立計画に対して援助を惜しまない旨が発表された。そして、その新し師範学校には、グラスゴー方式が正式採用されることを同委員会は決議した。⁹⁾

師範学校創設用校地として初めて候補にのぼったのはリーズであったが、英国北部への設立計画は断念され、46年の年会において、最終候補地をロンドンに選定することで決着した。翌47年、Westminster 区の今日 Horseferry Road と呼ばれる地が適地として同教育委員会より発表された。当時、Westminster 区はスラム化していて、多数の貧しい子どもたちがいるにもかかわらず、教育施設は皆無に等しく、文盲の子どもたちが打ち捨てられていた。そこで、熟慮の結果、スラム街ではあるがロンドン郊外のさわやかな地に決定されたのであった。¹⁰⁾

Horseferry Road に面した校地は、17世紀中葉より農園経営者の John Moody の土地であって、1840年代には Moody's Gardens と呼ばれていたが、彼の死後その孫娘に遺された。47年6月2日、5,000ポンドでウェスレー派の不動産となった。¹¹⁾師範学校創設に先立って、付設の模範学校(model school)が50年に設立されたが、最初の正規のカリキュラムの中

に園芸が誇りをもって採り入れられていた。かつての農園がそのまま残っていたのでそれは容易であったのであろう。後には、それに替わって手細工や木工が採用されたが、このような教科目の実践において、ウェストミンスターがパイオニアであったと考えられる。¹²⁾ メソディズムは、47年より国庫補助金対象の宗派に転換していた。¹³⁾

同派師範学校設立計画は、枢密院教育委員会初代事務局長 Kay-Shuttleworth の助力により可決し、49年3月2日付で発表された。師範学校の規模は、学生数男女100名の総定員で1,333名の児童を擁する実習校を付設するというものであった。ウェスレ派の教育活動の常なる困難は資金不足であった。土地代を含む設立予算総額は35,000ポンドと見積られた。5,000ポンドは百年祭基金でそれに当てられていたが、更に基金の残額21,000ポンドを含む23,000ポンドが捻出された。そして、2年後に校舎が完成したときには、師範学校校舎と校長住宅建設費補助5,000ポンドと、初等実習学校校舎と教員住宅建設費2,000ポンドの計7,000ポンドが国庫より支給されることになる。しかしなお、最低5,000ポンドが不足していた。¹⁴⁾

以後様々な機会に寄付が集められた。同派教育委員会議長のジョン・スコット (John Scott) の陳情になる、51年12月30日付枢密院教育委員会宛書簡によると、当初49年2月27日付で同委員会に申請された見積総額は30,274ポンド (土地代、校舎建築および設備費) であったが、結局総額38,274ポンドに達してしまったとある。そこで、国庫補助金の増額を依頼したいという内容であった。これに対して、Kay-Shuttleworth の後を49年に継いだ Lingen より52年1月10日付で、師範学校への増額は認められないが、実習学校への補助増額500ポンドを承認するという返信書簡が届いた。同派委員会は、大変納得できる回答であるとして喜んでいる。¹⁵⁾ 奇しくも、対立関係にあったローマ・カソリックの国庫補助立最初の師範学校 Hammersmith と同時の設立となった。

師範学校の基礎石が、49年9月27日に据えられたが、学校教育に対して無関心なものも多くいたので、大金をかけてばかげたことをしているとして 'Scott's Folly' と陰口もささやかれてもいたが、その事業は着々と進められた。

模範学校 (the Model School) が最初に50年6月8日に開校され、臨時的に Sugden (翌年師範学校の初代教頭となった) が担当教師となった。同年9月2日には、幼児実習学校 (Infant Practicing School) と下級実習学校 (Junior practicing School) が設置され、51年6月14日に上級学校 (Senior School) が開校した。次いで、同年10月6日に女子授産学校 (Industrial School for Females) と同時に Westminster 師範学校の開学式が挙行された。校舎は未完成であったが、10人の入学生 (男18、女2) がそれに出席し、数日後の授業開始日には、学生数21名 (男17、女4) となった。

ウェスレー派において平信徒の影響力は高くなっていったが、聖職者の手になる支配がなお続いていた。したがって、師範学校の校長に相応しい人物は、立派な聖職者であると同時に一般人としての能力をもち、しかも同派が抱える学校の教育問題に対処できる人が、同派教育委員会にて選考の対象になった。その結果、同委員長であって年会議長に再選されたスコットが初代校長に選出されたのである。¹⁶⁾ 同派の学校教育に対する並々ならぬ意気込みが感じられる。この年はロンドン万博が開催され、この学校にほど近いテームズ河畔の議事堂は完成したばかりであった。

枢密院教育委員会に52年提出された貸借対照表によると、全土地代9,391ポンドを含む総計費は38,249ポンド余であった。¹⁷⁾

53年の Westminster 師範学校生は、年間授業料15ポンドを納める一般学生34名(男24, 女10)と女王奨学生資格を得た男子10名とで44名となった。全在學生は、昨年度の中途入学者で1年未満の者や1年を超えて在学希望の者を合わせて68名(男46, 女22)であった。¹⁸⁾

この年の8月、枢密院教育委員会覚書が新たに発表され、師範学校の学年初めを1月とし、最低在学期間は2年に延長された。ウェスレー派においても、入学時期はまちまちで教育経営上煩しかったし、教師としての資質を養う上で、2年目は有効と考えられた。直にその規則に従うこととなった。

Westminster 師範学校開学の51年、Matthew Arnold が約20名の視学官の一人として任命された。英国教会とローマ・カソリック教会は、各々同派の聖職者が担当視学官であったが、彼のような俗人は非国教会の担当者であった。彼はメソディズムを含む約4,000校を30年余担当したが、ウェスレー派の学校教育に対して大変好意的で尊敬さえしていたといわれる。それは、彼の役職を支える助手となった Thomas Healing の影響もあったであろう。彼は Westminster 師範学校卒業後6年間初歩学校の教師として活躍し、Arnold に認められたのである。Arnold は、この師範学校に対しても親密な思いを抱いていた。¹⁹⁾

II グラスゴー方式の採用

宗教的・道徳的人格の形成を原理としたストウのグラスゴー方式の教育方法に、メソディストたちは魅せられていた。²⁰⁾

資金不足のウェスレー派が、経費のかかるグラスゴーでの教員養成を何故選択したのであろうか。Pritchard は上記の他に、次のような示唆をしている。(1) ベルとランカスターのモニトリアル・システムは、すでに長年実践され、その欠点が一般に知られるようになっていた。(2) また、教師も聖職者や医者と同じように専門家としてのトレーニングが必要であると認識されつつあった。(3) ストウは当時既に有名であり、グラスゴー方式と彼の師範学校は多くの支持を受けていた。²¹⁾そこで、入学金だけでも、51年に至るまで10~15ポンドも払って留学させてきたという訳である。

Arnold が1853年に Westminster 師範学校を視察したときの報告書によると、2年余しか開設していないにもかかわらず、世俗教育は申し分なく適切に行われている。また、それ以上に宗教教育が重視されていて満足できる。週日学校における宗教教育は、枢密院教育委員会において推進されべきものとされているが、宗教的人格こそ教師の資質として最も重視されるよう指導されている。毎朝夕学生全員による祈禱式があり、毎週校長による宗教教育についての教科が組まれている。また、聖書と聖書の歴史についての補足的試験も国家の教員資格試験に先立って行われている。道徳性を育てることに配慮が行き届いていて、教師の個人的影響力が教育において最も重要であることが充分認識されている。²²⁾ウェスレー派は、先の拙論において論じたように、宗教的人格の形式という課題に重点を伝統的・本質的に置いてきた。²³⁾ストウもそれに重きを置いていたが、そのことだけではウェスレー派がグラスゴー方式を選んだ理由にはならない。何故なら、ベルもランカスターも共に宗教教授に重点を置いていたからである。

Kay-Shuttleworth によれば、彼がストウの師範学校を尋ねた1837年頃、本国における真正正銘の教員養成機関は唯一つ、グラスゴーにのみ存在すると感じた。その教育目的は、(1) 一般的知識を教師志願者に伝達すること、(2) グラスゴー方式の原理を実行できる

ようにするための実習により、その基本と教授法に精通させることであった。²⁴⁾

ストウの教育論によると、教育 (education) は、しばしば知性に訴えるところの教授 (instruction) と混同されるが、人は知的・肉体的存在であると同時に道徳的存在であって、情緒と感情をもった不断に発達する存在である。すべての教育は、本質的に自己教育 (self-education) であって究極の目的は道徳にある。道徳教育の基本は行為 (doing) である。行為は次第に一生涯を貫く道義と結合した習慣を形成することになると考えた。それ故、ストウの Training の意図するところは、事細かに説明したことを理解した上で行わせる指導を重視したように、理解と行動の両方を含んでいた。²⁵⁾

ストウの教育観は、能力と態度の形成を習慣の形成と捉え、それを「訓練」と名付けて、形式陶冶を説いた。教育を習慣形成と考えたので、「訓練」と言い換えているのである。また、次のようにも言う。人は一般的に教育というと専ら学校を思い浮かべるが、学校の影響力は第二義的なものにすぎない。子どもの知的、身体的、道徳的向上に役立つ利点をもつ家庭教育に倣って、学校は、生徒の全能力を毎日、同時に働かせることによって自己教育力 (the power of education himself) を獲得させることにある。²⁶⁾ 自己教育力に重点を置いたストウの教育観は、メソディズムの宗教的人格形成のためのクラス・ミーティングを中心とする自助の精神と相互学習の実践を髣髴させる。このような教育観にウェスレー派が親近感を覚えたであろうことは想像に難くない。

ストウ自身が述べているように、彼の教育論は折衷的なものであって「生活は陶冶する」というペスタロッチの教えに従い、子どもの遊びを監督しないというものであった。学校の些事を機械的に実行するに長けた助教生は、その教師同様役立たないものであって、教育の真髄は、陶冶された精神 (a cultivated mind) が未陶冶の精神に及ぼす相互作用であり、思考力を目覚めさせ、探求心を刺激し、知性の力を発展させることにあつた。また、ストウの「仲間の共感」(sympathy of numbers)、すなわち個人の努力の基準を高め、健全な仲間意識を發展させべく働く、暗示と模倣の不思議な力を強調している。²⁷⁾ 良い行為を褒め、非行を非難するという形で「仲間の共感」が効果的に作用すると考えた。生徒たち相互の共感とともに、生徒たちが教師にも共感することの重要性を彼は説く。教師と生徒たちとの打ち解けた関係、信頼関係が必要であり、教師は子どもになったつもりで子どもたちの遊びや娯楽に参加するのがよい。子どもの性格や気質を完全に知るのに役立つと考えた。彼は道徳訓練を特に重視していたので、教師の監督を強調しすぎる欠点はある。しかし、気晴らしと健康増進と休息のために、そして運動のために遊び場が重要であることをよく認識していた。また、子どもの創造的活動が遊び場で展開されることを期待していた。²⁸⁾

メソディズムにおいては、子どもの遊びを積極的に認めた様子は窺えない。ストウの遊び観とその教育実践への活用において、メソディズムのそれと対立するものであったのであろうか。J・ウェスレーの教育観とその実践の継承において、子どもの遊びを否定する教育観が誇大に流布された感はあるが、ウェスレーはそれを次のように否定している。「賢明な親は、また子どもの視覚による欲望を楽しませることに用心しなければならない。したがって、可愛い遊び道具や輝くおもちゃ、バックル、ボタン、また素敵な衣服や装飾品など、すべて目を引くものを与えてはならない。」²⁹⁾ 人間存在の現実を、原罪により墮罪している人間と見、これを人間の本性に関する解釈の出発点とする彼にあっては、人間性を解放する自然主義的思想は許されなかった。ジョン・ロックのような近代の自然主義的

自我、理性主義を超越し「聖化」へと解放される人間を追求した彼にとっては、子どもの我欲は勿論、我意も否定されべきものであった。

しかし、Kay-Shuttleworthにおいても、生徒にレクレーションの時間を与えなかったし、その必要はないと考え、バターシー師範学校において子どもの遊びは無視され、教官および生徒の中から選ばれた監督生によって絶えず監視させた。³⁰⁾ストウは遊びについて高邁な思想を説いたが、教育実践においてはどうかであったのであろうか。

ストウの「教師の人格的・道徳的影響力」や「生徒同志の共感」という言説に粉飾されることによって、「監視者」としての教師が子どもを管理しているという実相が見えにくくなっていただけではないか、とする指摘がある。一斉教授の起源をストウの実践に求めるならば、一斉教授とは、生徒の注意を一斉に引くことができる人格的・道徳的影響力をもった教師と、生徒同志の共感によって成り立つ教授法だと規定できるかに見える。だが、ストウの言説を字句通りに受け取るわけにはいかない。「世論はストウにとってむちの代わりであった」といわれるが、「ランカスターは、公的な不名誉や恥を体罰に代わるものとして有益な効果があると信じていた。」彼の「仲間の共感」は、ランカスターの賞罰システムと実質的に近かった。³¹⁾バーチナフも言うように、実際には子どもに自由を充分与えてはいなかったのではないか。その限界について彼は次のように批判している。

教師と児童との精神的相互作用が強調されたことは多大な貢献であった。しかし、余りにも口頭による指導に傾斜しすぎ、また実際には、児童の管理が厳しくて十分な自由が与えられなかった。児童の行為自体を充分発展させることはできなかったのである。³²⁾このように見てくると、遊びについての両者の見解の相違は、それほど重要な障壁とはならなかったのではないかと考えられる。

ランカスターの教育の基礎は宗教であり、宗教教育こそ真の教育に不可欠な基礎手段であると彼は考えていた。彼の教育目的規定は、1780年代のメソディスト派の日曜学校のそれと一字一句違わなかった。しかし、彼の「宗教教育システム」には一つの落とし穴があった。それは、手段としての「有用な知識」の教育が、徹底化されればされるほど自己目的化し、その結果全体の宗教教育システムの中からすべり落ちて行くという矛盾であった。³³⁾そして、結局世俗教育中心に墮して行く内外学校協会とは距離を置いていたウェスレー派の教育政策が、グラスゴーへと赴く一因になったであろうことは否めない。

モニトリアル・システムは、人間の〈利己心〉あるいは〈エゴイズム〉を基本的に肯定することから出発している。人間が快楽を求め、不快を避けるという、一面ではきわめてリアルな社会的人間像に立脚したものであった。教室の隅々までこの賞罰システムを張りめぐらせていた。モニターは、そういうメカニズムの歯車の一つにすぎなかった。³⁴⁾ジョン・ロックが近代市民社会を肯定したのに対して、社会的な何ものにも強制されず、全く自我による動機と興味に動かされ、人間理想の実現に向かって邁進する子どもの自発性が教育の基本である、とJ・J・ルソーが信じたことは周知のことである。前述のウェスレーの遊び観において触れたように、ロック以降の近代的人権意識に立つ、実証主義や功利主義を否定し、神に対する絶対的服従の信仰に向かったメソディズムにとって、モニトリアル・システムの本質的部分において不快感を覚えていたとしても不思議ではない。

モニトリアル・システムはシステムとして完成すればするほど、知識・技能そのものが教育面においてその意味を失い、休む間もない号令のもとで、服従と規律の習慣を形成することの比重が増していった。この学校で形成される資質が、工場における規律の下で必

要とされる資質と同様のものであれ、親にとってはそのような社会化機能は反感こそめて、決して歓迎できないものであった。実際に、モニトリアル・システムに対して嫌悪や反感を抱いており、公営学校の不人気の一因となっていると捉えている視学官もいた。³⁵⁾30年代末ともなると、そのシステムの欠陥はもはや誰の目にも明らかであった。ストウの教育原理、すなわち教養ある教師の人格による刺激の如何が教育を決定するという原則の方が真理に映ってきたのである。ベルとランカスターは、教師の啓蒙については何の用意もなかった。そこでの教師は、本質的に監督者であって、命令する権力者にすぎなかった。³⁶⁾

視学官たちも、モニトリアル・システムでの教育が、知識・技能の教授においてさえ充分役割を果たしていないことに気づいた。それと同時に、中産階級家庭に範をとり、学校を創り出すことを企図していた視学官にとって、モニターはその任に堪えられる者ではなかった。学校の成否の鍵を握っているのは教師である、というのが視学官の一致した見解であり、望ましい教師とは、市民社会の価値観を自らの内部に浸透させ人格化した人物としての教師であった。³⁷⁾

「学年制学級」(graded schools)という新しい方式がグラスゴーに生み出され、各地で模倣されていった。一つの大きな学級(schools)は、一人の大人の教師が、同一の教科内容を教え、全員同時に学習するように指導するというものであって、学校全体は教頭(head master)によって管理されていた。³⁸⁾国庫補助金の申請が提出された初等学校に対して、45-50年かけ申請条件を満たしているかを視察した視学官報告書によると、教師による一斉教授を推奨して次のように述べられている。

大きな教室(gallery)は手前から階段方式により次第に高くなっていて、教師は黒板の前で説明する。かつては児童に丸暗記を強い、理解なしの読み方をさせ、教師の説明は全くなく、児童が何を心に描いているかを確かめることすらされなかった。その教育方法は次第に減少しつつあり、教師の質の向上が認識されつつある。しかし、このような認識の一般化からは遙に遠く「教育が犯罪を予防する手段となっていないことに大いに驚く。読み書き、算数、文法、地理、歴史などの教科が人格を形成するのでもなければ、社会のよき一員にするわけでもない。もし、それらが道徳的配慮なしに単なる教育の手段として教授されるならば、罪悪のために大きな能力を与えることに他ならなくなってしまうであろう。」³⁹⁾モニトリアル・システムによる犯罪予防的効力への期待は裏切られ、このような新たな形で、つまり宗教教育に力を入れた中産階級主導の民衆教育政策が展開されることになったのである。

同報告書の中に、内外学校系初等民衆学校の幾つかにおいても一斉教授(simultaneous lessons)により文法、地理、自然科学、聖書の解説の各教科が行なわれていることが指摘されている。しかし、その教授は極めて不十分で、クラス全体が教科内容を理解することからは程遠いところにある、と視学官が慨嘆している。「3分の2の生徒は只黙ってすわっているだけである。教師の問いかけに答えているのは年長の一部の生徒だけであって、それを聞いて周囲の3分の1の生徒が同時に答える。時には教師自身が口をそえたりしている。」しかし、この一斉教授(simultaneous teaching)が目され、それに向かう傾向にあることは望ましく、集団指導の経験を積んだ有能な教師が養成されれば、モニターを無視できるまでになるであろう、との見解が添えられている。⁴⁰⁾先に示した、ArnoldのWestminster師範学校視察報告の激賞とは遠く隔っている。

30年代後半から40年代にかけては、モニトリアル・システム批判から、民衆初等教育の

新しい方法が模索された時代であった。その渦中において、ウェスレー派はなお宗派教育に固執しながら、モニトリアル・システムに替わる教育方法としてグラスゴー方式を見出したのであろう。Pritchard の示唆した、前述の採用についての4つの理由はほぼ妥当であるといえよう。

それに付け加えて強調したいことは、彼等がグラスゴー方式の何に特に魅力を感じていたのかということである。やはり、教師の道徳的資質とそれが生徒に与える影響力の重要性をストウが充分認識していたところに、グラスゴー方式の長所を同派が見出したことが、その大きな要因の一つではなかったかということである。翻って考えると、38年同派教育委員会が発足し、初代委員長スコットの下、最初の年次報告に2つの重要な教育方針が出されている。(1)すべての幼児学校、週日学校、日曜学校は、宗教を中心に包括的なカリキュラムが組まれなければならないこと、(2)同委員会が教師養成とその資格認定についての監督を開始するに当たり、その教師の徳性や人格が、先ず巡回説教師によって保証されなければならない、と明示されていた。⁴¹⁾

スコットは、同派の教育の現状を誰よりも正確に把握していたし、本質的に実践的な人間性に富んでいた。校長としての彼は、支配や恐怖よりも、相互信頼と尊敬の規律を重視した。彼がその役職にあった Westminster 開学以来17年間、学内の自治を重んじて最少限度の規則しか示さなかった。生徒たちの自律心が育つよう、教育のすべてにおいて配慮されたのである。⁴²⁾グラスゴー方式採用に当たっての推進役の代表は、やはりスコットであって、彼の教育観が大いに影響していたであろう。

付記

Westminster 師範学校創設に当たっての枢密院教育委員会との関係、またストウのグラスゴー方式とモニトリアル・システムを、ウェスレー派の教員養成政策と関連して検証することにより、同派の目指した教員養成の目的と初等民衆教育の方法等、その教育観を明らかにした。また、それらの関係性の中で浮かび上がってくる、枢密院教育委員会の民衆教育政策の目標との親近性についても言及した。

宗派教育を中心とするウェスレー派の教育政策と枢密院のそれとは、46年以前の対立が幻であるかのように、協調関係が築かれて行くかに見える。46年体制に同派が取り込まれた姿を逆に見れば、同派従来の教育政策が、国家の手により後押しされている情景とも錯覚され兼ねない状況が垣間見えよう。

本課題についての更なる探究である、III ウェストミンスター師範学校の教育内容、IV J・スコットとその教育観については、誌面の都合上次号にて論究したい。

註

- 1) Mathews, H.F.; Methodism and the Education of the People 1791-1851. London, Epworth Press, 1949, p.124.
- 2) Pritchard, F.C.; The Story of Westminster College 1851-1951. London, Epworth Press, 1951, P.5.
- 3) Scotland, James; The History of Schottish Education. Vol.1, University of London

Press, London, 1969, P.313 (白石晃一「ストウ (1793-1864) のグラスゴー方式の特徴」筑波大学教育学系論集, 17-1, 1992, 10.PP.1-17)

- 4) Mathews, H.F. op.cit., P.139の表中, Teachers Accepted for training の項。
 なお, ※の師範学校在学生68のうち38が Westminster 校在学生と思われる。
 (The 13th Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1852. London, 1853, P.35.)

SUMMARY OF GROWTH OF DAY-SCHOOLS AND SUNDAY-SCHOOLS, 1841-51

Year	Number of Day-schools				Total Number of Children in Day-schools	Teachers Accepted for Training	Number of Sunday-schools	Teachers	Scholars
	Boys	Girls	Mixed	Infants					
1841	67	40	—	24	11,462	6	3,444	68,186	379,165
1842	119	115	—	28	18,533	7	3,554	70,885	378,047
1843	141	121	—	28	20,804	12	3,797	76,061	401,383
1844	183	109	—	40	25,463	42	3,940	77,404	417,010
1845	69	67	162	34	30,686	44	4,103	81,577	417,903
1846	67	71	179	53	34,285	60	4,106	80,998	436,299
1847	50	45	251	49	37,341	38	4,104	79,655	425,071
1848	64	58	230	56	37,804	43	4,269	81,780	442,896
1849	57	59	253	44	38,968	30	4,344	83,972	461,597
1850	54	56	247	40	38,623	30	4,434	86,253	465,875
1851	56	49	231	33	37,972	68* (at Westminster)	4,275	82,804	441,741

(Mathews, H.F.; Methodism and Education of the People 1791-1851. London, Epworth Press, 1949, P.139)

- 5) Scotland, James; op.cit., P.314.
 6) Mathews, H.F.; op.cit., P.130.
 7) Scotland, James; op.cit., P.316.
 8) 三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房, 1968.P.317.
 9) Mathews, H.F.; op.cit., P.129.
 Pritchard, F.C.; op.cit., P.12.
 10) Pritchard, F.C.; 'Education' A History of the Methodist Church in Great Britain. Vol.III, Epworth Press, London, 1983, P.290.
 11) Allen, Brigid; 'The Wesleyan Training College, Westminster, and the History of Its Site, 1687-1914' Westminster College, 1983.11.
 12) Pritchard, F.C.; op.cit., The Story of Westminster College 1851-1951. P.15.
 13) 拙論「19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソディズムの教育政策と民衆学校教育について (2) —— 教育政策の転換を中心に」明星大学教育学研究紀要, 第11号, 1996.3.
 14) Pritchard, F.C.; op.cit. 'Education' PP.12-13.
 15) The 13th Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1852. London, 1853, PP.42-6, 122-7.
 16) ibid., PP.11-6, Pritchard, F.C.; op.cit., The Story of Westminster College 1851-1951. PP. 14-7.
 17) The 13th Annual Report of the Wesleyan Committee of Education 1852. op.cit., P.46.

BALANCE-SHEET OF THE BUILDING ACCOUNT OF THE WESLEYAN TRAINING SCHOOLS, WESTMINSTER.

JAMES HUNTER and JOHN RATTENBURY,
 In Account with the WESTMINSTER TRAINING SCHOOLS.

	DRS.	£.	s.	d.
To Subscriptions and Collections at different times.....		30,539	16	9
Money received from Sale of Old Materials		210	0	0
Amount of Grant to be received from Committee of Council on Education.....		7,500	0	0
		<u>£38,249</u>	<u>16</u>	<u>9</u>

	CRS.	£.	s.	d.
By Money paid for Site.....		9,391	0	0
" for School-rooms,College,Principal's and Masters'Houses,and other Buildings*		21,595	2	5
" for School-Fittings and other Buildings (including Fixtures, Desks, and Benches,School Bells,&c.)		2,851	5	10
" for Outhouses		342	0	0
" for Boundary Walls of Fences		1,119	0	0
" for Architect's per-centage		1,280	0	0
" for Legal Expenses		618	7	9
" for other Expenses.....		1,053	0	9
		<u>£38,249</u>	<u>16</u>	<u>9</u>

- 18) *ibid.*, P.39.
- 19) Pritchard, F.C.; *op.cit.*, The Story of Westminster College 1851-1951.PP.27-8.
- 20) *ibid.*, P.5.
- 21) Pritchard, F.C.; *op.cit.*, 'Education'p.288.
- 22) Arnold, Mathew; Reports on Elementary Schools 1852-1882. 1889, PP.261-5.
- 23) なお、拙論「J・ウェスレーの教育観に関する一考察——メソディズムの世俗的教育実践に関連して」明星大学教育学研究紀要、第8号、1993.3.に詳しい。
- 24) Birchenough, Charles; History of Elementary Education in England and Wales from 1800 to the Present Day. University Tutorial Press, London, Thirded. 1938, p.363.
- 25) *ibid.*, P.267.
- 26) 白石晃一、前掲論文。
- 27) Birchenough, Charles; *op.cit.*, p.268
- 28) 白石晃一、前掲論文。
- 29) Wesley, John; 'On the Education of Children' Sermon XCV, The Works of the Rev. John Wesley A.M.ed.by Thomas Jackson, London, 1872, Vol.VII, P96.
- 30) 三好信浩、前掲書、PP.192-3.
- 31) 児美川佳代子「近代イギリス大衆学校における一斉教授の成立について」東京大学教育学部紀要、32,1993.3.
- 32) Birchenough, Charles; *op.cit.*, P.270.
- 33) 安川哲夫「"Schools for All" の成立過程について（下）——ベル——ランカスター論争の分析を中心に」金沢大学教育学部紀要、人文・社会・教育科学編、32,1983.3.
- 34) 上野耕三郎「教室の誕生前史——19世紀イギリス教育史研究その2の3」小樽商科大学人文研究、87,1994.3.
- 35) 上野耕三郎「英国勅任視学官報告書（1839-49）に見られる教育の論理—近代国民学校成立の一考察」教育史学会紀要、第23集、1980.10.
- 36) Birchenough, Charles; *op.cit.*, P.289.
- 37) 上野耕三郎、前掲論文「英国勅任視学官報告書（1839-49）に見られる教育の論理」
- 38) Birchenough, Charles; *op.cit.*, P.269.
- 39) Extracts from the Reports of Her Majesty's Inspectors Schools Intended Chiefly for the Use of the Managers and Teachers of Such Elementary Schools as Are Not Receiving Government Aid. Longman, Brown, Green and Longmans, London, 1852, Preface.
- 40) *ibid.*, P.140.
- 41) Mathews, H.F. *op.cit.*, P.123.
- 42) Pritchard, F.C.; *op.cit.*, The Story of Westminster College 1851-1951. P.17-8.